
貪食IS-Gaping IS-

水深無限風呂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

貪食IS - Gapting IS -

【Zコード】

Z4709Y

【作者名】

水深無限風呂

【あらすじ】

『おやま
憚しい姿の異形となつた朽ちぬ古龍の子孫』『貪食ドラゴン』。

数々の不死者を食らい尽くし、貪り尽くしてきた存在。

そんな貪欲の塊とも呼べる存在が、ある一人の騎士を殺し、人間性を得たところ。

実際に奇怪な文章を白い光に見ることとなる。

その奇怪な文章とは　　『人間となり、別の世界へと侵入します』
　　『というもの。』

そして次に貪食ドラゴンが目を覚ました時には既に以前の憚しい姿

はどこにもなく、貪食ドラゴンの姿は可愛らしく少女のものとなつていた。

この話は、匠も腰を抜かす劇的ビフォー＆アフターを終えた貪食ドラゴンと、そんな彼女を親切心からつい拾つてしまつた厨二病の抜けきらない平社員とか、未だ厨二病の抜けきらない変態企業の社長とかの物語。

ダークソウル界のアイドルこと『貪食ドラゴン』がヒヒの世界に転生する話。ゆるほわ貪食系を田指して頑張ります。

厨二病の抜けきらない平社員は特に出番多くありません。原作でいう五反田弾程度です。

変態企業の父親はそんなに出番多くありません。原作でいうクラリッサ程度です。

プロローグ 最後の生贋（前書き）

今回は何かプロローグなんで殺伐としてますが、基本的にゆるほわ貪食系で行くつもりです。

ゆるほわ貪食系がどんなのかは知りませんが。
まあ。

何がともあれ、ハイスピード学園貪食系ラブコメディ、開幕です！

プロローグ 最後の生贋

血とヘドロと汚物、更には忌々しい呪いの息が充満する『最下層』。

全ての不要物の辺り付く場所であり、全ての迫害者がその一部となり、肥大し続ける世界の死体。

全ての生を受けし者が名前を呼ぶことすら拒み、行く事となれば自害を選ぶほどに拒否され続ける場所。

そこに向かうは偽りの使命に駆られた迫害者 生持たずして

人の形を模る『不死者』 のみ。

不死者は幾度と死のうとも呪いにより蘇り、永遠の苦痛を味わい続ける。

そして、その末には思考することを放棄し、本能がままに動き続ける機械人形 亡者と化す。

亡者となれば、世界の終るその日まで永遠に何も考えず、何も感じず、死んでも、殺されても、分解されたとして生き返り続ける。

愚かな不死者共は亡者となる前に『えられた』『使命』を果たそうとする。

使命を果たすには一つの前準備が必要である。

一つは、朽ちた不死者共の教会に取り付けられた鐘を鳴らすこと。そして二つは、世界中の不要物を溜め込んだ最下層の更に深層。疫病と猛毒ばかりが充满する瘴気に満たされた汚染所、病み村の最奥に存在する鐘を鳴らすこと。

数々の不死者はその試練に挑み、多くは教会の鐘を守り続けるガーゴイルの手によつて消し炭と化すが、ごく稀に一部。上の鐘を鳴らし、下の鐘を鳴らさんとする者が現れる。

だが、未だに下の鐘が鳴り響いたことは一度もない。

それ以前に、ある日を境に病み村に辺り付く人間はぱつたりと居なくなつた。

何故か。

理由は至極単純である。

病み村への門を開く鍵を飲み込んだ『貪食ドラゴン』の存在である。

貪食ドラゴン　　ウロコのない白龍『シース』の裏切りにより世界各地に散らばつた朽ちぬ古竜の子孫。

だが、その姿は多くの神話で語られるような恐ろしくも神々しいその姿とは懸け離れている。

理由は単純明快。住み着く場所が『最下層』だつたからだ。

食物と呼べるような物など一切なく、腐肉と汚物を食り尽くすしかない。その汚らわしい世界に神々しい古竜の体は徐々に蝕まれ。結果。

その姿は胸から腹に掛けて大きく裂け、そこに大きさの揃わぬ不出来な歯を無尽蔵に並べた大口を持ち、更には竜の出来そこないである『蛇』にも似た体を持ち、六本の足従わせ、背中には劣化の始まっている四枚の翼を持った、非常に悍しい異形へと変貌した。

更には『不動』と呼ぶにまさに相応しい性格は失われ、ありとあらゆる物をいじましく食り尽くす誇りなき性格へと豹変している。言つならば、亡者と化した古竜。

そんな存在が病み村の鍵を飲み込み、以後流れ的に守護し続けている。

体は瘴気に蝕まれ、全てを焼き尽くす熱の吐息は失われたとはいえ、その強靭な肉体と巨大な体は全てを圧倒し、何人たりとも寄せ付けない。

更に最悪なのはその習性だ。

目に付いた物は何であろうと、食り付くし、噛み碎き、飲み込む。普通の人間ならば即死で終わりだろう。

だが、不死者はこの貪食ドラゴンに挑み続ける限り、何度も噛み碎かれ、飲み込まれる体験をしなければならない。

それは体は朽ちぬとは言えど、心は死ぬ不死者にとつて最大最悪

最強の武器である。

そんな最強にして、最悪であり、劣悪である貪食ドラゴンへと、
今日も一人愚かな不死者が挑む。

その名は『受け流しヴァレンティーン』。不死者となる以前は百
戦錬磨の騎士であった。

彼はその異名通りに敵の攻撃を左手に持つ『バネ仕込みの盾』を
使って見事に受け流し、がら空きの体に右手に持つ『貫きの剣』に
よる致命の一撃を放ち、全ての敵を一撃で葬り去つてきた強者であ
る。

その腕は不死者になってからも朽ちることなく、亡者共の攻撃
は当然。鐘を守護するガーネイルの攻撃すらをも受け流し、一撃で
仕留めて来た。

今日も抜かりはない。

誰しもが一度も勝利したことのないと言われる貪食ドラゴンへと
挑む寸前になつても、ヴァレンティーンには不安などは一切存在し
ない。

存在するのは圧倒的自信と、途切ることのない集中力、そして
溢れんばかりの力であった。

そんな彼は貪食ドラゴンが待つ大広間への入り口を塞いでいる白
い光に触れようとして、壁に橙の助言ろう石 不死者同士がそ
の先の情報を壁や地面に書きこみ、お互いを助け合ひ、また騙しあ
う道具だ で書かれた文字を見て、思わず苦笑した。

その文字とは。

『この先かわいい奴あり』。

脳みそまでカビたか。それでよく生きられたものだ。

そこまで思い、ふと、再び苦笑する。

すでに生きてはない、か。

自分の置かれた状況を再確認したヴァレンティーンは緩んだ集中力を引き締めなおし、ゆっくりと白い光の中へと入り込んでいく。目の前に広がった光景に、思わずヴァレンティーンはもう一度気を緩めてしまう。

壁には大きなヒビが入り、そこから求め綺にた太陽の光が差し込み、床に広がる汚水を照らし、乱雑な彩色を浮かび上がらせ。数々の戦闘で崩れた柱が不規則に影を生み出し、その影は一つの芸術品のようにさえ見えた。

思わず「ほん」と息を吐した。レンテ、ロンたつたか
再び気を引き締めなおす。
直後

大広間の最奥、崖となって污水を下に吐き出し続ける六場から目大な蛇の頭のようなものが此方を覗いていたからだ。

その頭はヴァレンティーンを見つけると、左右に振つていいた首を止め、ヴァレンティーンを強酸性の液体のような毒々しい黄金の瞳でじいっと睨み続ける。

無機質で死に続けるような瞳に睨まれても、ヴァレンティーンは微動だにせず、ゆっくりと戦闘体勢へと移る。

グオオオウオオオ

猫が喉を鳴らす音にも似た醜悪な音を鳴らしつつ、貪食ドラゴンは人の手にも似た不気味な六本足を器用に動かし、深淵の底から這いずり出てくる。

まるで悲鳴のような雄叫びと共に貪食ドラゴンは這いずり出、その巨大な全身をヴァレンティーンに噛しむことなく晒すと。

大きく体を仰け反らせ

貪食者の象徴である大口。

貪食竜の大口を惜しみなく開いた。

数多は並ぶ東北第一なるぐらむ碑ぐれどにか若くおほき

ヴァレンティーンは右手の貫き

強く握りなおして、駆ける。

は上級の騎士ばかりでも所持してゐるであらう。一般約定防具だ。

神の加護や特殊な力も込められておらず、あの巨体

「この攻撃を食らうは即死は免れないであります」

「ハーフの距離を詰める。」

狂うはその大足

「アユミも三体を技えて一ノ段だ。アユミのダメージを止めれば、

それがヴァレンティーンの考へであつた。

右手の真まの角に轟轟の三が原を眞面目に見ゆる
一つに食らわせる。

が

刃は通らない。

何
?

現状をヴァレンティーンが飲み込む前に、貪食ドラゴンはヴァレンティーンへと倒れ掛かってくる。

当然、避け切れず、その巨体の下敷きとなる。

直後にヴァレンティーンの全身を襲う激痛。

数箇所には鋭くも鈍い歯が複雑に突き刺さっている。

そこまできて、ヴァレンティーンはようやく理解した。

貪食ドラゴンが不敗たる所以を。

その異形の姿にばかり気を取られて、誰もが知らなかつた理由。だが、それはよくよく考えれば実に簡単に推理できることでもある。

古竜のウロコは、岩よりも硬く、また、傷つかず、古竜が朽ちるのを阻害しているものだ。

そして、この貪食ドラゴンもその古竜の子孫であり、多少は劣化しているだらうが、そのウロコは非常に堅甲だらう。

……更に言えば、弱点となりえる足には当然その絶対数も多い。ならば、ヴァレンティーンの攻撃が通らないのは至極当然の出来事であらう。

何を馬鹿なことをやつしているんだ、私は……。

ヴァレンティーンが自分の過ちに気付いたと同時に、貪食ドラゴンは再び悲鳴にも似た空気を振るわせる雄叫びを上げた後。倒した体をそのままに、地面を這いずり始めた。

ヴァレンティーンは貪食ドラゴンの巨体と、凹凸の激しい地面に挟まれ、すり潰されて行く。

それは非常に、そして異常な痛みをヴァレンティーンへと刻み付ける。

だが、ヴァレンティーンは最後の足掻きをする。

ウロコで刃が通らないなら。

感覚などなく、痛みだけを無造作に伝えてくる右手に力を入れ。

ウロコのない口腔内を狙えぱい。

強く握った貫きの剣を、勢いよく口の前に広がる血のよじにじです
黒い赤色をした肉に突き刺す。

剣は容易く根元まで沈んで行き、ヴァレンティーンを飲み込まん
とばかりに大量の赤を噴出す。

普通の生物なら明らかに致命傷であろう。

そして、ヴァレンティーンは苦笑する。

こんなバケモノ相手でも、致命の一撃で倒せるとま。つく
づく私は運がいい。

内心で苦笑しつつ、ある事に気付いた。

……貪食ドラゴンの動きが一向に止まらない。

まるで、ダメージを受けていないかのように。

そう、確かに普通の生物なら致命傷だろう。

だが、朽ちぬ古竜に急所は存在しない。

たとえ、剣の一本が突き刺さろうと突き刺さらんと、なんら変わ
りはない。

その事に気付いたヴァレンティーンは思わず焦りを覚えた。
ここまで身を挺した一撃を食らつても怯みもしないことに。

本当に倒せるのか？

そう思つた瞬間に、ヴァレンティーンの下半身に一際大きな牙が
突き刺さり、遂に千切れる。

声にならない叫びをヴァレンティーンは上げるが、誰も聞くもの
は居ない。

次に右手、次に左手、次に首下。

普通の人間なら即死のダメージだが、不死者であるヴァレンティンは頭が無事な限り生き続ける。

どのような苦痛を浴び続けても、永遠に。

だが、その永遠は長くは続かず、ヴァレンティーンの頭は起き上がった貪食ドラゴンの足によつて熟れ過ぎた果実のように容易く踏み潰された。

瞬く間の静寂。その静寂は貪食ドラゴンの勝利を示していた。そして、踏み潰されたレヴァンティーンの頭から黒い精が現れ、貪食ドラゴンへと吸い込まれていく。

それはレヴァンティーンが数々の亡者共から抜き取つてきた『人間性』。

生命の全てである『ソウル』とは別に人間にのみ存在するモノ。その人間性が貪食ドラゴンの体に入り込んだ瞬間。

貪食ドラゴンの体に異変が訪れる。

巨大な体中に幾何学的な紋章が走り、肉体に刻まれ、赤く燃える。だが、不思議と貪食ドラゴンは痛みは感じず、ゆつくりと眠りに着く様にうずくまる。

そして、貪食ドラゴンの体はゆつくりと透けていき、そのうちに以前飲み込んだ病み村への鍵がコトリ、と地面上に落ちる。

それは、肉体の消失を意味していた。

次には貪食ドラゴンの視界がだんだんとぼやけ、白い光に包まれていく。

そんな光の中に貪食ドラゴンが見た物は、人間性とよく似た黒い文字で書かれる。

『 人間となり、別の世界へと侵入します 』

実際に奇怪な文章だつた。

プロローグ 最後の生贋（後書き）

受け流しヴァレンティーンの出番は終了。お疲れ様でした。

01 - 親方、裏庭に女の子が（前書き）

主人公が如き脇役の登場。そして厨二病の旋律。

01・親方、裏庭に女の子が

「……帰つたぞ」

玄関のドアを開けつつ、男が声を発する。

だが、家中は人が居るどころか明かりすら点いていない。

理由は単純明快。

この男が一人暮らしだからだ。

一応それなりの大きさの一軒家に住んではいるが、同居人は誰もいない。

一人で暮らすには実に広すぎる家だった。

だが、アパートやマンションなどは彼の性に合わなく住み心地が悪い。

だからこの孤独にも耐えるしかない。

そう再び思いつつも、男 朔咲尚紀さくさい なつきは明かりを点け、身に付けていたスーツを乱雑に脱ぎ捨て、ソファへと深く腰を沈める。

(……ニコースでも見るか)

尚紀は何気なくテレビの電源を入れ、適当にチャンネルを回してペニコースを映す。

『 グリッグス大統領は自分の容疑を否認し、それに対しペトルス評議員は 』

移った画面には幸薄そうな大統領と、キノコ頭のブロンドの悪人顔の男が何やら口論している場面が映る。

それだけなら軽いコメディにも見えるが、どうやらニコースの内容は政治関連のモノらしい。

そしてそれは、尚紀の最も得意とするニユースであつた。

ニユースを目にした途端。尚紀は落胆したかのよつた表情を浮かべ、ゆっくりとポケットから携帯電話を取り出す。

そして、電源の入つていなソレをゆっくりと耳に当て。

「……俺だ、どうやらグリッグスがまたミスをしたらしいな。本当にアイツはアテになるのか……？ 何？ フツ、まあいい……お前がそう言うんだから間違いはないのだろう。ああ、任せろ。……では、また連絡する。いつもの合言葉か？ 忘れるはずがないだろう？」

「……炎の導きを……アンバサ」

もう一度説明しよう。

尚紀は一人暮らしであり、同居人もおらず、実は後ろに友人が……ということもない。

では、この行動は何なのか？ と言われば答えは一つしかない。

“特に意味はない”

満足げな表情をしつつ、尚紀は耳に当てていた携帯電話をポケットへと再び捻じ込む。

そしてそのまま、訪れる虚無感に身を任せていたところ。

「……？」

ぼどり、と庭の方で何かが落ちてきたような音が聞こえた。

「なんだ……？」

小鳥程度が落ちた音の大きさではない。

少なくとも40～30kg程度の重さのモノが落ちた音だ。

「一体何が？」

得たいの知れない恐怖、そして怖いもの見たさ。一つの相反する

感情に尚紀は揺らぐ。

見に行くべきか。行かないべきか。

じつくりと悩み、そして、父親がよく口にしていた『虎穴に入らずんば虎子を得ず』という言葉を思い出し、決心する。

尚紀は立ち上がり、音の発信源である裏庭へと懐中電灯を持ってゆっくりと進む。

（もしも、この世のモノとは思えない超不気味な怪物が居たらどうしよう……いや、馬鹿。そんなのありえるわけないだろ。きっと鷹とか鳶とかが雷に撃たれて落っこちてきただけだ。うん、そうに違いない）

どちらもどちらとて在り得ないシチュエーションだと思えるが、ある意味どちらも有り得る。

何せ、この世に在り得ないことなど存在しないのだから。だが、尚紀は父親の『虎穴に入らずんば虎子を得ず』という言葉を再び思い出し、勇気を持って裏庭へと続くドアを開け放つ。そして、懐中電灯を忙しく当たりに照らして『落ちたモノ』を探す。

その手は明らかに震えており、また、その行動から焦りと恐怖心も伺える。

なんとも弱い男である。

そんな尚紀が大きくライトを振った一瞬。

草むらの影。一部だけ不自然に黒い部分を尚紀は見つける。

おかしいと思い、再び尚紀はライトを向ける。

そうすれば黒い部分は穴などが開いているワケではなく、光を反射してカラスの羽のような紫色を所々見せる黒色の何かだと尚紀は気付く。

恐らくは、これこそが先ほどの音の原因なのだろう。

その色から尚紀はカラスか何かかと判断し、ゆっくりと近づいて

いく。

ある程度正体が見えたからか、尚紀は先ほどまでの恐怖を振り払つたか」とく、堂々とした足取りで進んでいく。

そして、尚紀が『ソレ』に手が届く程に近づいた時。

「なつ……あつ……！？」

ようやく尚紀は『ソレ』の正体を把握する。
カラスのような光の反射によって所々紫色に光る黒髪の『少女』だ。

回りの暗さ故に顔しか見えないが、その肌は美白を通り越して病的な程白く、血色も余りよくない。

それを見て、尚紀は不謹慎ながらも以前見た『世界一美しい死体』を思い出してしまつ。

（……生きてるよな？ 生きてるはずだ、生きてないなんて許さない……いや、許さなくてどうする！ 生死はどうちらでもいいから取りあえず家に運び込むしかない！ 死体が庭にあつたなんてことが公になれば俺は ッ！）

自然に発見されるまで放つておき、発見されても『知らない』の一点通じでなんとかなりそうなものだが、パニック状態となつた尚紀はそんな事は考えず、目の前でぐつたりと倒れる少女を抱き上げ、小走りで家中へと掛け戻る。

裏庭、玄関の鍵を何度も確認し、完全な密室を作つた事を確認して、ようやく尚紀は肩に抱いた少女をソファへと下ろす。
……そして、下ろして気付いた。少女が一糸纏わぬ姿である」と

に。

思わず尚紀は一瞬、考えることを止める。

「……おこ、どうこう事だよ……なんなんだよ」ねえッ……」

そういうことである。

ガンッとテーブルを右手で思いつきついた尚紀だが、そんな天の声が聞こえたような気がして、気を落ち着ける。

そして、テーブルを強く殴つたために痛む右手をする。

「…………」

死んだかのように眠る少女は、これだけの音が鳴つても動じない。

……本当に死んでるんじゃないだろうな？

そんな考えが一度だけ過ぎるが、それを尚紀は頭を振るよじにして振り払い、もう一度田の前の少女をじっくりと観察する。

……精巧な人形のように『過ぎる』ほど整っている顔。

……雪のように白く、血すら通つていなかのよつた肌。

……皆無ともおかしくない胸の厚み。

……抱き締めやすそうな、いや、もはや抱き締めるひとを前提に作られたかのような体つき。

……躍動感溢れる少女の手足とはまた違つた、背徳感と加虐心を搔き立てる弱弱しい手足。

「…………」

その田の前に存在する『人形のような』少女を見て、尚紀は黒い思考を思わず浮かべる。

「…………」

尚紀は思わず自分の最低な思考に反吐がでたくなるが、何とか堪え、最寄の壁による。

そして手を壁に付けて一度深呼吸し……。

「俺は口リコンじやないッ！ 親父とは違うッ！」

この二つの言葉を延々と吐きながら壁へビデンドンと頭を叩きつける。

一軒家暮らしでよかつた！

つぐづぐそういう思う尚紀である。

八度ほどこれを繰り返したところ、ようやく尚紀の思考は落ち着き、『衣類が無ければ買えばいいじゃない』といつどいかの悪女のようなことを思い浮かべる。

思い浮かべたら後の行動は実に素早く、財布を片手に外へと飛び出す。

そして買って以来使った回数が一桁に達していないマウンテンバイク（音速の流星群）にまたがり、最寄の服屋を目指して全速力でペダルを漕ぐ。

大体十分ほど漕いだどうか。

遅い時間で幸い走っている車も少なく、体力を余らせた中学生のような乱暴な運転でも事故一つ起こさずに尚紀は“走行中に両足が攣る”という日頃の運動不足から来たアクシデント以外は何事も無く無事に服屋へと辿り着いた。

「ハーアー、ハーアー……」

荒い息を吐きながら、服屋の前で尚紀は肩を上下させつつ、ポケットから電源の入っていない携帯電話を取り出す。

「俺だ、今、敵の要塞……ああ『アイ・キャンセラーズ・フォートレス不可視の要塞』に到達した……、
今より『サイレン・ナイトストーカー沈黙の追跡者』作戦を開始する。ああ、任せろ……ミスも
ぬかりも一つもない。……では、また連絡する。炎の導きを……ア

ンバサ「

一人芝居でいくらか落ち着いた尚紀はポケットに携帯を捻じ込み、服屋へと入る。

そして真っ先に向かうは女性下着コーナー。

見事な直角カーブで最短距離を進み、まるで予めコースを予定していたかのような動きで女性下着コーナーへと尚紀は食い込む。

もちろん、その途中でカゴを手に取るのも忘れない。

そして次に行うのは田に付き、そしてあの少女のサイズと合ひつであろう下着を無造作に一枚ずつ取つては買い物カゴへとぶち込む。そんな作業を約一分ほど続け、合わせて約三十六枚ほど適当にぶち込んだあと、再び見事な直角カーブと斜線移動によりカウンターへと進む（ちなみに尚紀の独断で上側の下着はぶち込まれていない）。

「あ、あの。お客様……？」此方の商品は……」

無表情でそんなことをやつてのけた尚紀へと、実は入店時から様子がおかしいと思つてずっと見ていたカウンターの向こう側の店員は若干引き気味で何かを言おうとするが、尚紀の表情を見てじもつてしまふ。

しかし、まあ。

店員がおかしく思つうのも当然であり、必然である。

幼児用のものを買つならまだしも、今回尚紀が買ひものカゴにぶち込んでいる下着類のサイズは明らかに思春期真っ盛りの少女達用のサイズ。

思春期真っ盛りの少女、ということはつまり、自分で下着を選ぶのが当然の年頃であり、尚紀のような父、……あるいは兄姉たりに該当しそうな人間が買つ商品ではない。

よつて、考えられる用途は非常に変態チックなものだらう。

「これが欲しいんです」

だが、そんな女性店員の視線にも尚紀は怯まず、トーンの変化がない一直線の声で言つ。

「で、ですが……お客様……？」

「これが、欲しいんです」

「お、おきや」

「欲しいんです」

「1)、合計で34920円になります」

最終的には尚紀の気迫に押された女性店員はよじよじと引き下がる。尚紀は内心勝利の味をかみ締めつつ、財布の中から尚紀は五万円札を取り出し、カウンターへと静かに置く。

そして沈黙を決める尚紀。……ちなみにカウンターの店員はちよちよとチラチラと尚紀の顔色を伺っていた。

しばらくの沈黙が過ぎ、会計が終了し、店員が大きなビニール袋に下着類を全て入れ終わり、尚紀に渡した瞬間。尚紀は再び、どうぞの頭文字イニシャルが四番目のアルファベットになつていて、漫画も青ざめるドリフトテクを多用して服屋から飛び出す。

「…………」

飛び出た尚紀はゆきくつとポケットから携帯を取り出す。
そして、耳へと当てる。

「ああ、俺だ。作戦は無事成功した……。ああ、惜しいヤツを無くしたがな。『偉大なる一枚』……ヤツは素晴らしい戦士だった……三十六体の『垣間見える魅力』を洗脳し、碎け散つたよ……、

ああ、ああ……何時までも落ち込んでいられない、か……。安心しろ。俺を誰だと思っている？……ふつ、そうだ、俺は俺だよ。ではな、また連絡する……炎の導きを……アンバサ

お決まりの一人芝居をした。

それを終えると、ポケットへと携帯電話を突っ込み、再びマウントンバイクへとまたがる。

そして、先ほどの足が轡つた際のダメージもあるために今度はゆっくりと漕ぐ。

結果、家に着くまでに約三十分掛かったのは言つまでもない。

01 - 親方、裏庭に女の子が（後書き）

あれ、今回もゆるほわ貪食系になつてないぞ？
ゆるほわ貪食系がどんなのかは知りませんけど。

02・片道切符（前書き）

本来作成してた一話が不慮の事故で消え去ったから急遽書き上げた
……これはそんな話です。

私は一度も腹が満たされたことがない。

「アミ」を食つても、ヘドロを食つても、岩を食つても、生者を食つても、死者を食つても、不死者を食つても、何を食つても。

『満足』というモノを味わったことがない。

私は気付いた時には薄暗く薄汚く瘴気に満ちて正氣を失つ世界に閉じ込められていた。

何もすることもなく、何ができるわけもなく。

永遠とも呼べる空白の時間。

ついには痺れを切らして、辺りの物を口にしてみた。もともと食物ではなかつたのだろうけど、あまりの不味さに吐いた。

でも、しばらくしてみて再び口にしたくなつた。

今度は吐かなかつた、でも、代わりに『餓え』が襲つてきた。

餓えて餓えて餓えて餓えて餓えて。

いくら食つてもいくら食つてもいくら食つても。

一切満足しない、できない。

貪つて貪つて貪つて。

瘴気に飲み込まれて、蝕まれて、水面に映る私の姿は日に日に憚おそれまよ

しい物へと豹変していった。

小人共は見た目を重視するらしいが、古龍の子孫である私には関係のないことだ。

そう思つて毎日毎日貪る。

そんな生活を続けていたところ、ある日を境に私の元へ小人共が現れるようになった。

命知らずの馬鹿共か、それとも自信家が身を滅ぼしに来たか。どちらにせよ自殺願望者に違ひはない。

食つて食われるこの世。死にたがりの能無し共は食つてやう。

私は即座にそう判断し、ここ最近で最も憚しくなった胸部から腹部にかけての大口で食らつてやつた。

味も何もわからないが、食い千切る感触と、抵抗する相手を躊躇し、己の糧とする『狩り』に似た感覚が実に私を楽しませた。

そして最も幸いだつたのが、その小人共は何度殺しても蘇ることだつた。

その場で、とはいかなかつたが、一度食つた奴でもその後しばらくすれば再び私の前に顔を出した。

何がしたかつたのかは全くもつて分からなかつたが、私としては非常にありがたいことだつた。

小人が来ては食らい、小人が逃げては食らい、小人を見つけては食らい。

そんな生活を一週間も続けた頃には小人共が主食になつた。

時には三十人程度という大勢で現れる奴らもいたが、何ら問題なく食らつた。

そして、そいつらを食らつて分かつたことが一つだけあつた。

小人共を食らうと、たまに黒い精が姿を現すことがある　　た

しか、小人共は人間性とか呼んでいたか。

それを食らえば、私にしては珍しく多少満たされたような感覚を覚えた。

『これが、満たされるということか』と思つと同時に『またいらぬことを覚えた』とも思つた。

実質的には後者の考えが非常に正しかつた。

それから毎日『人間性』を求めては殺戮を繰り返す日々。

だが、一向に小人共は人間性を落とさず、苛立ちも募るばかり。

そんなことを繰り返している内に、人間性は強者や聖者……伝説上の人物などに多いということがわかつた。

元々は小人共の伝説になど興味のなかつた私だが、動かぬ古竜たちが互いの情報を交換し合うために使つてゐる、特定周波数の魔術を拾い（私が瘴気に蝕まれたせいかどうかは知らないが、断片的にしか拾えなかつたが）、小人共の情報を集めた。

結果として、どうやら小人共は私が数日前に飲み込んだ鍵や、私の尾に眠つてゐる武器（もつともそんな物を眠らせてゐる気など毛頭ないのだが）などを狙つてゐるらしいことが分かつた。

だが、そんなことがわかつても私には無駄だつた。

何せ、私は忘れるような過去に辿り着いたこの大広間から外に出られないのだから。

苛立ち。

苛立ちばかりが募る。

人間性は全く得られず、最近では殺した小人共を食らつこともやめ始めてゐる。

食らうのも腹立たしい。

そう、思つていた日々。

その日々は、いつ終わつたのだろうか。

意外と早かつたかもしれないし、遅かつたかもしれない。

よく、覚えてはいけないが。

半分以上忘れかけているが。

あの、騎士を殺した瞬間に。

「……んう……？」

ゆつくりと瞼を開ける。

それと同時に途方もない疲労感と空腹感。

苛立ちは それほどない。

だが、それに代わつて『驚愕』があつた。

天井が、白い。

菌糸が蔓延り、ヘドロが『びり付き、死肉が垂れる見慣れた天井
じゃない』。

いや、それ以前に『眠る』こと自体が久しぶりだった。

天井が白い。

しかも、それだけじゃない。

地面が、柔らく、暖かい。

更には軽く、それでいて暖かい何かが私に覆いかぶさっているよ
うだった。

驚愕の連續。

あまりにも驚く点がありすぎて、どちらか反応したらいのかわ
からない。

「やつと田覗めたか……『グッナイ・ホワイトプリンセス眠れる白姫』よ……」

そんな驚愕の連續に襲われる中、横から聞きなれた小人の声が聞
こえた。

また私に食われに来たか

?

そう思つて横を見れば。

小人じゃなくて大人だった。

でかい。

私のサイズから考えれば相当な大きさだ。

私がすっぽりと収まるサイズが大聖堂一個分程度なので、私を遙
か上から見下ろしている「イツは小人共からすれば顔が伺えないほ
ど巨大であるう。

あまりのサイズに今までに一度も感じたことのなかつた『恐怖感』
というものを感じた。

そうすれば、自然と後ろに下がつて

。

「あ、バカ、そつちは

」

直後。

視点が大きく上を向くのと同時に、後ろへと引っ張られる。

「んひやあつ！？」

瞬く間の浮遊感。

そして、背中に衝撃。

痛みは感じないが、何が起こったか未だに整理がつかない。

……そんな私へと、世界は無情にも追撃を掛けた。

半透明の壁に移る姿 おそらく私の姿 。

それは、以前に食らい食らつた小人共のモノとなっていた。

あ、なるほど。アイツが大きいわけじやなくて私が小さくなつたのか。

……て、納得できるかつ！？

「は……？ あえ？ え？ は？ あ？」

とりあえず体の向きを正常に戻し、立ち上がるうとする。

が、上手く立てず、半透明の壁に体を押し付ける形で立ち上がった。

……そうだ、小人共は足が一本なんだつた。

なんて抜けたことを考えつつ、半透明のカベに映りこんだ自分の姿をマジマジと見る。

足はかなり細く、元の私が触れたら簡単に折れそつなほど。肌の色は非常に白い。脂肪ぐらいは白いんじゃないだろうか。

腰周りも細く、何とも栄養が足りていらない感じだ。……小人共の基本的な体系がどうか知らないが。

それと、何故か腰にのみ衣類が着けられている。青と白の縞々模様の逆三角形の物体。……なんだこれは、護符か何かか。まあいい。

おそらく何の力も感じないあたり何もないのだろう。

次に腹部……らしいところを見て、そのまま胸部……？ へと視線を移す。

見事にない。

私の象徴であり、誇りでもあつた大口が。

数々の英雄気取りの能無し共を胃の中へと送つた牙が。

なせた なせた?

脇部は挙じてみれば中々の強力
胸郭なども存在するのか分からぬ二三ヶ所彭ひまた、その頸部に

新鮮な肉のような色合いの突起。

で、そこから更に上に上つて……顔。

私の中の汚点である。竜の出来損なしである。蝶は似て

うん、普通に小人共の顔だこれ。

ただ、よく整つてはいると思う。小人共の顔をいちいち見ていた
ワケではないが。

そしてかつての私のウロコように光の反射によって鈍い紫に輝く

黒髪。強酸性の液体のような毒々しい黄色の瞳。二つ巴、ムツムツ見えてる。

卷之三

あ、それと声も小人と同類のモノになつていた。当然か。むしろここまで来て声のみが元と同じだつたらおかしい。

「ビ、ビうした？ 何かあつたか？」

余りにも突然に私を襲つた激変に、私が散々に混乱していると後

この小人が私へと話しかけてきた。

…… そうか、この男だ。この男に違いない！ こいつが私の姿を

変えた、そうだ。そうと考えれば納得が行く！
勢いよく後ろを振り向き、男の顔を指差す。

「お、オマエだなッ！？ 私をこんな姿にしたのは！ 呪術師か？
しかし、貴様。私をこんな姿にして……何を考えている？ 陵辱
でもする気か？ ハツ、やはり能無しの小人共は考えることは分か
らん！ いいか、とりあえずだ！ 私を元の姿に戻せ！ 今すぐに
だ！」

私の完璧かつ完全な推理が命中したことに呪術師は大変驚いたよ
うで、目を丸くしてこちらを見ている。

……まさか本気で陵辱するつもりだったとは……。
私が男になつたらどうするつもりだったんだ、こいつは？

「クツ……、クククツ……中々の推理だ……。だが、違う。俺は貴
様を擬人化させた挙句に陵辱しようなどと一切考えていない。……
俺は貴様から力を借りようとしただけだ、そう『一貪食なる古龍の
子孫（ゲイピング・アトモスフィア・オールドドラゴーン）』であ
る貴様と契約することによつてなあ……」

気味の悪い笑い声と共に男はそんなことを言つてくる。

契約……？ 契約だつて？

まさか、そんな馬鹿な。

確かに、小人共には時折古龍に祈りを捧げ、古龍の特権である『
朽ちない体』を得て、生命の超越を目標とする奴らもいる……とは
聞いたけど。

まさか。

私と契約しようとなんて……。

別にできないワケじゃない。私だつて一応瘴気に蝕まれてるとは
いえ古竜だ。

だが……。

「……貴公、どうなるか分からんぞ?」

そう、どうなるか分からない。
基本的に『契約』というのは契約者へと近づく為のモノ……だと
聞いた気がする。

何處かに隠れている『暗黙の神』なら、暗黙の神の象徴である『
復讐』をひたすらに繰り返すようになるし。

何處かに閉じ込められている『ダークレイス』なら、手当たり次
第に他人の世界に侵入して殺戮を及ぼすし。

何處かに眠り続ける『最初の死者』なら、周囲の世界に災厄をば
ら撒くし。

……まあ、他にも人間同士だと化け猫とか、衰弱したデーモ
ンだと神の幻だと契約する奴もいるみたいだけど……そんな
のは知らない。あんなのは所詮『ヒツ』遊びだ。

で、話を元に戻すが。

私と契約する。

どうなるんだ?

やはりあれだろうか、他の古龍と同じような感じになるのだろう
か。

それとも『貪り続ける者』とか呼ばれるようになるのか?

……それ以前に私は何を求めればいいんだ?

追記すれば、契約した相手には予め一品の『献上物』を決めてお
き、それを一定数献上した契約者には力を貸す……というルールも
ある。

私が欲しい物……、うん。人間性だな。あれを食うと満たされる。

「フツ……今更この身、どうなろうと構わんさ……、ただ、どうせ
なら闇に呑まれる前に呑んでやろうと思つてなあ……」

とかなんとか色々と考えていたが、どうにも男はどうしても私と
契約したいらしい。

……仕方ない。

契約しなければ元の姿に戻してはくれないだろ？

「なら、跪け」

私が地面を指差すと共にそう言えば、男はゆっくりと跪く。

……。

……。

契約つてどうやるんだっけ。

いや、知らないワケではない。忘れたダケであつてだな……。断
じて知らないワケじゃないぞ。本当だからな。

……まあいいか、たぶん大丈夫だろ？

互いが契約してるとと思つてれば……。

「よし、もういいぞ。これで貴公は今日から『^{一ズベック}食り続ける者』だ
「ほう、なるほど……さしづめ『食り続ける者』といった所か
……。で、名前は？」

……うん？

男の様子が急に変わつたぞ。何だ？ 一重人格か？
それに名前つてなんだ。意味が分からぬいぞ。

「……何？」

「だから、お前の名前はなんだ。と聞いてるんだ……」

……うん？

名前？

「いっぽは何を言つてゐるんだ。

古龍に個別の名前などあるわけないだろ？」

「……脳みそまでカビてるのか？」

「名前など無い。……何せ私は古龍の子孫だからな

「……もつ乗らんぞ、ほら、さつわと自分の家に帰つたらどうだ？」

「んん？」

自分の家……って、あの大広間か？

……いやいや、どうやつてここに連れられて來たか分からぬし。
といふか、あれ家か？ いや、違うだろ？……。

それ以前にこいつ……自分で召喚して帰れとは。『//召喚主
だな。

「……家も、ない」

「……何？ じゅ、じゅあ両親は？」

両親……？

古龍にそんなものが居るわけないだろ？

こいつはこんな中途半端な知識で私を呼び出したのか？

んな見た目にしてまで。

信じられん。

「親など居るはずがないだろ？」
「なあっ……！？」

男がものすごいショックを受けたような顔をする。

「何をそんなに。」

元々古龍とはそんなものだろ？

「……本当に名前もないのか？」

「だから無いと言っている……。それよりも早くもとの姿に戻してくれ、こんな情弱な姿で過ぐしたくはない」

「元の姿つて……、何だ、それは」

「なつ……！？ 貴様、自分から変えておいてそれはないだひつ……」

？ 私の本来の姿だ！」

私が再び男を指差しながら言つと、男は顔を引きつらせて固まつている。

……なんでそんな顔するんだ……？

まるで、そんな顔されたら……本当に何も知らないみたいじゃないか。

「……恐らく、だが。その姿を俺は見てない」

「な、何を……？」

不安が生まれる。

それと同時に。

何か、とても重要なことを忘れているような……。

そんな感覚に陥る。

「君は、家の裏庭に倒れていたところを……俺が拾ったんだ」

「は……？」

「ひ、にわ？」

……。

ゆつくつと思い出す。

白い世界で。

私が見た文を

。

人間となり、別の世界へと侵入します

』

』

ああ、なるほど。

そういう、ことか。

落ち着いて外の風景を見てみる。

……明らかに違う。

何も、かもが。

……。

恐らくここには、ロードランの地ではない。

ロードランの地がブレて出来上がった平行世界でもない。
そのロードランの地とその周辺の世界を一括りにして、そこから離
れた大きな括りの世界だ。ここは、

古竜も。

怪物共も。

不死者も。

神も。

私の知るモノは何も存在しない場所、そう。きっとここはそんな
場所だろう。

「は、はは……」

思わず崩れるように座り込む。

何故だ?

何故……?

どうして、こんなこと……?

02・片道切符（後書き）

おかしいな、ゆるぼわ貪食系じゃない。
……ゆるぼわ貪食系がどんなものか知りませんが……。

03 - 裏側（前書き）

一話の尚紀視点。手抜きとも言つ。

俺はただ、部屋の中で椅子に腰をかけて休んでいた。

……昨日の晩は散々だった。

結局俺はあの後買つてきた下着を少女へと着せ、更にはボロボロになつた足で少女を背負つて二階まで運び、ベットに寝かせた。それでようやく一安心し、すこし眠りについた後、必要はないと思つが、少女が記憶喪失だつたり（こちらも否定できない、何せ真夜中に全裸で美少女が裏庭に落つこちでいるなど常識の範囲を既に超えているからだ。決して俺が厨一病だからではない）した場合のことを考えて三週間分の有給を取つた（この時つづく普段使つてなくて助かつた、と思つた）。

ちらり、と横を見る。

そうすれば未だに死んだように眠る少女。

……脈はあるから死んではないのはわかっている。だが、どう見ても死んでいるようにしかみえない。

「……んう……？」

と、そんなことを思つていたところ。少女が目を覚ました。

喜び、そして同時に不安も覚える。

もしも少女がマトモな少女だつた場合……俺はナニカサレる。通報的な意味で。

だが、今更引けない。やるしかない。

「やつと田覚めたか……『眠れる白姫』か……『グッナイ・ホワイトブラン・スベセ』か……」

適当な名前で呼びつつも、立ち上がって近寄る。

少女は強酸性の液体のような毒々しい眼でこちらを凝視していた。そしてその表情は驚愕。

「あ、これ。ダメなパターンでしょうか？」

そう思つた矢先、最悪にも俺の考えは的中していったようだ……少女は勢いよく後ろに下がり、俺から距離を取ろうとするが。

「あ、バカ、そつちは

「んひやあつ！？」

俺の制止の声も空しく、盛大に落つこちた。

一瞬の間があつて、ごどん、と盛大な音。

……恐らくは背中を強打したのだろうな。……俺なら十分は悶え続ける痛さだ、きっとこの少女も悶えるに違いない。

と、思つたが。少女は落ちたときの体勢のままガラスを凝視したまま硬直していた。

……何を見てるんだ？

そう思つて俺もガラスを覗いてみるが、ガラスの向こう側はいつも通りの平和的かつ退屈な光景。

が、どうにも少女は町並みを見ているわけではなく、ガラスに映つた自分の顔を見て硬直しているらしかつた。

……雲行きが怪しくなってきたな……。

「は……？ あえ？ え？ は？ あ？」

短く息を吐くような声を出しながら少女はガラスへと体を押し付けつつ、立ち上がる。

まずい。これは面倒なことになつたかもしれない。

……とりあえずマトモな終わり方はしなさそうだ。

そう思いながらも少女の様子を伺うと、ペタペタと自分の体を触

りつつガラスに映りこんだ姿を見て確認しているようだった。

そしていきなりの叫び声。

思わず心臓が止まるかと思つた。

……本格的にこれはまずい空氣だ。
絶対これはマサモなシチュエーションじゃない。

通報されてもいいから普通の展開がよがつた。

「どうした？」何かあつたか？」

恐る恐る聞いてみると、少女は勢いよく「あら」を振り向き、俺を見ている。

敵意というより殺意を剥き出しにして。

……どうやらたらそんな可愛い顔でそこまで恐怖感を煽れるんだ！

「お、オマエだなッ！？ 私をこんな姿にしたのは！ 呪術師か？
しかし、貴様。私をこんな姿にして……何を考えている？ 陵辱
でもする気か？ ハッ、やはり能無しの小人共は考えることは分か
らん！ いいか、とりあえずだ！ 私を元の姿に戻せ！ 今すぐに
だ！」

物凄い饒舌でよくわからない」とを言われた。

陵辱で。しねえよ。俺は親父とは違うんだから。

というか、呪術師？

ああ。

この少女も俺と似たクチか……。
少し乗つてやるか。

「クツ……、クククツ……中々の推理だ……。だが、違う。俺は貴様を擬人化させた挙句に陵辱しようなどと一切考えていない。……俺は貴様から力を借りようとしただけだ、そう『一貪食なる古龍の子孫（ゲイピング・アトモスフィア・オールドドリームーン）』である貴様と契約することによってなあ……」

気持ち悪い笑い声と共に適当な設定を広げてみる。
これで満足か、厨二病患者（仮）の少女よ。

「……貴公、どうなるか分からんぞ？」

少女が疑うような表情で言い放つ。

……満足してない！？
むしろ乗つて来た！？
どういづいじだよ……。
仕方ない。もう少し乗つてやるか。

「フツ……今更この身、どうなろうと構わんさ……、ただ、どうせなら間に呑まれる前に呑んでやろうと思つてなあ……」

自分で言つていて相当イタイ。

……だが、これで少女も流石に引いただろ。そしてこの茶番も終わるだろ。

そしたら後は適当に名前とか聞いて家の場所聞いて。遠いようならどいかの施設に頼めばいいし、近いなら俺が送つて行つてもいい。

「なら、跪け」

……終わらなかつた。

地面を指差しながら少女はそんなことを囁つ。

「いつ、おそれく相当重症だ……。

だが、さつとやらないと満足しないのだろうから跪く。

……中学二年か高校一年くらいの少女に跪かされている……親父なら狂喜乱舞しそうなシチュエーションだ。

そして沈黙。

「よし、もういい。これで貴公は今日から『貪り続ける者』だ」

……え、終わり？ 詠唱とかするもんだと思っていたが……。
よくわからん。

しかし、これでもう満足しただろ？……。

「ほ、なるほど……わしずめ『^{ニーズベック}貪り続ける者』といった所か……。で、名前は？」

流石俺だ。

物凄く違和感がある感じに聞けた。
少女も目を丸くして固まつてゐる。

「……何？」

「だから、お前の名前はなんだ。と聞いてるんだ……」

案の定聞き返してきたので、言い直す。

だが、少女は未だ目を丸くしたまま固まつてゐる。

「名前など無い。……何せ私は古龍の子孫だからな

……また厨二病か？！

しかし、乗ると永遠に終わらないやうなので、乗りはしない。

「……もつ乗らんや、ほり、わつわと自分の家に帰つたらどうだ？」

多少突き放しすぎただろうか。

自分でも多少思うが、俺は何分人と話すことに慣れてない。
しかし、これで少女もきっと

「……家も、ない」

何？

まで。やはりおかしくないか？

先ほどとは違い、静かな混乱に見舞われているよつた表情をする
少女に、俺は違和感を抱く。

やはり、正常なシチュエーションじゃないのか？

「……何？ ジヤ、ジヤあ両親は？」

「親など居るはずがないだろ？」

「なあつ……！？」

平然と、それが当然のよつて言つ少女。

……やはりおかしい。

「……本当に名前もないのか？」

「だから無いと言つてはいる……。それよりも早くもとの姿に戻して
くれ、こんな惰弱な姿で過ごしたくはない」

『もとの姿』。

先程と同じ風に聞けばただの厨二病だが、どうにも少女の
声色は面倒くわざつであり、演技や嘘を吐いている風には見えない。

「元の姿って……、何だ、それは

「なつ……!? 貴様、自分から変えておいてそれはないだらう。」

? 私の本来の姿だ!」

もはや不安で満たされ、乗る気にもなれなかつた俺が普通に返したところ、少女は焦つたよつた表情を浮かべつゝこちらを指差してきた。

その表情は焦つと不安。

「……恐らく、だが。その姿を俺は見てない

「な、何を……」

ゆつくつと、静かに返す。

少女はショックを受けたよつで、自分の頭を自分の手で押さえながら、震えている。

……なんだこれは?

「君は、家の裏庭に倒れていたところを……俺が拾つたんだ」

「は……?」

少女が涙声で返す。

……なんだこれは?

「は、はは……」

しばりくして、少女は崩れるよつて座り込み、俯いてしまつ。どうこつ……! となんだ?

04・食（繪書き）

食食ひつゝの上鱗を覗むる回。

「どうこうことだ……」

先程から何度も同じ言葉を繰り返しつつ、俺は一階のキッチンでカツプラーメン（最近人気の兄貴塩と弟味噌だ）に熱湯を注いでいた。

……先程から少女はずっと俯い黙り込んでいる。

その空氣に耐えられなくて思わず飛び出して来たが……、どうにもまずい氣がするので、何とかして理由をこじつけつつ戻ろうとしたら『飯を作る』ぐらいしか思いつかなかつた。

「……はあ」

思わず溜息吐きつつ、お湯を注いだカツプラーメンを両手に持ち、階段を上がつて行く。

そして一段一段上がつて行くことに陰鬱な雰囲気が漂い始める。

……うわあ、部屋の外までオーラ出でるぞ……これ……。

そしてそのオーラは扉の前まで来た時点で相当なものになつていた。

「は、入るや？」

自分の部屋なのだから確認することもないのだが、なんとなく確認してしまう。

……いや、いや……、そういう不可抗力みたいなものが染み出していくな……。

部屋に入つてみて後悔。

少女はベッドの上で未だに俯きながら負のオーラを排出し続けて

い。

……どうこいじだ、おい……！

こいつ……（心が）死んでるじゃねえか！

なんて馬鹿なことを考えていないと、少女の今の服装との雰囲気からして俺が少女を強姦したみたいな考え、そして雰囲気に呑まれる。

してないのに。

してないのに！

「お、おおい。そう気を落とすな少女よ……ほら、なんだ。何があった？ 話してみる。話せば楽になるかもしけんぞ？」

「……」

少女が光の無い瞳でこちらを見ている。

うわあ。

これがリアルレイプ日か。

と、再び馬鹿な考え。

考えてないと以下略。

少女は何も言わなかつたが、俺は少女の隣へと腰を掛け、カツプラーメンとフォーク（もしかしたらこの少女が箸を使えないかもしれないのを考慮した。正直言つて自分を褒めたい）を手渡す。

少女は一応受け取ると、再び俯いてしまう。

あ、ああ……カツプラーーメンの底が素肌に当たつて……絶対熱いぞあれ……。

しかしどうやら、この雰囲気だと話を聞くのは相当困難を極めるかもしえないな……。

「……私は

とか思つていたら、ボソッと喋り始めた。

よかつた、少しは気が楽になる……俺が。

だが、陰惨な話でないことを願う。俺はそういうのが非常に苦手だ。

「……いや、やはりこの話はするべきじゃない……、したといひで、お前は私を狂人だと思うだけだろう……」

やつぱりダメだったッ！

……しかし、俺のかなり個人的な意見と、偏見。そして常人離れた思考が言うには……。

おそらく、この少女は異世界から来た……んじゃないか……？
何せ、まず最初に見つけたシチュエーションがおかしすぎる。
今日の朝に確認して分かったが、俺の家の裏庭は非常に狭く（と
いうか裏庭というより空きスペースだ、あれは）、更に自然に生え
てきたよく分からぬ植物とやけに横に広い天井のせいで上から裏
庭に入ることが不可能だ。

……少なくとも、落ちる音以外何も音を立てないでは。
なら……『突如虚空から現れた』というのもっとも正しい解釈
じゃないだろうか。

そして、次に少女の容姿だ。

髪色……まあ、これは染色ならこんな光り方もするだろう（それ
にしても不自然だが）、だが、目の色だけは異常だと胸を張つて言
える。

何せ、人の瞳の色は大きく分けて八種類ほどしかない。

確かにその中には黄色っぽい瞳もある。

だが、それも黄色というよりは黄緑だつたり、オレンジに近かつ
たりする。……だが、この少女の瞳は明らかに『黄色』なのだ、通
常なら絶対にあり得ない色……だと思う。Wiki先生を流し読み
した限りじゃ。

……全然胸張つて言えてないな。まあ、いいか。

「……そつか、まあ……、話したくなつたら話せ、決して笑いなどしないから安心しろ」

「……なぜだ?」

「だって、俺はお前の『契約者』なのだから」

「世迷言を……」

少女がやぶ睨みで此方を見つつ、そんなことを囁つてくる。

よ、世迷言で……。一度しか言つてないぞ。

とこつか今時世迷言なんて言葉使う少女なんていないぞ……」
つ絶対転生者だろ……流石転生者古臭い。

それにしても相当ドライだ。この少女。それこそ凍傷しそうなぐらいに。

「ま、まあ。とりあえず食え、食えば……いへりかマジシになるかも
しれんぞ」

「……」

少女は此方の顔をじつ……と見つめてくる。

その瞳は獲物を見つけた毒蛇のような冷徹さが籠つており、俺は
思わず体を若干引く。

な、なんだ……？ 何なんだ？

「お、俺は食うなよ……？」

「……チツ」

なんとか場を和ませようとして冗談気味に言つてみたところ、少
女は本当に不機嫌そうに舌打ちして俺を見るのをやめる。

……俺を食う気だつたのか！？ カニバリズムもいとこりだぞ

……？

少女は俺を既に見てはいないが、だんだん怖くなってきた。

この少女は……実は怖い人なのかもしない……。

いや、さつき自分のことを『古竜』とか呼んでいたから……転生者だと仮定すれば元々は人肉を漁り食い続ける恐ろしい竜だったのかもしれん……。

「……これは、どうやって……食べばいい?」

とか何とか思つてゐると、どうにも少女はカップラーメンの対処にしてこずつててゐるようだつた。

決定した。この少女は絶対転生者だ。カップラーメンを食えない日本人など存在せん。

「てこずつててゐるようだな、手を貸そつ

かつて中学生のころに酷く夢中になつていていたゲームの台詞……だつたようなものを言いつつ、少女が手に持つカップラーメンの蓋を開け、中を指差す。

そうすれば、少女は意外と頭が回るのか、一緒に渡したフォークを使って麺を取り出し、ゆっくりと口へと運ぶ。

……ああ、熱いぞあれは。火傷する。うん。

そう思つていたが、少女は平気な顔で麺をズルズルとすする。

……どうせ俺が猫舌なだけですよ。ええ、悪かったね。

俺のコンプレックスを無意識のうちに突いたことなど気にもしない少女は麺をすり終わると、もしゃもしゃと租借し飲み込むと動きを止め。

涙を流していた。

「ど、どうした? 熱かったか……?」

「美味しい……」

「……はい？」

「……これほど美味しいなど……恐らく庶民には手が届かないほど高いのだろう、貴公……さては王族だな！？」

先程までの陰鬱な雰囲気は何処へ行ったのやら。

久しぶりにまともな食事を与えられた欠食児童のように少女はラーメンへとがつつきながら意味の分からぬことを言つてきた。

……王族つて、いつの時代の一族だ。

「いや、庶民だが……ついでに言えれば、それは最底辺クラスの食品だぞ」
「なん……だと……？」

田を丸くして俺の顔を凝視している。

……意外と表情豊かだな。先程までは死んだように無表情だったか、じつはイロイロと表情が出てくると結構可愛いかもしれない。

「まさか……、此方の世界にはこれほど美味しいものが数千と存在するとも言つのか！？」

「いや、まあ。一応」

フォークの先端を此方へと向けながら少女は攻め立てるように聞いてくる。

危ない、やめる。

……それにしても、此方の世界とか言つちやつたよ、この子。しかしまあ、カツ・ラーメン如きでここまで騒ぐとは……何を食つて生きてきたんだ……？

「この名前はなんと言つ……？」

「ああ、これが。これは『K・u・ラ・ーメン』と呼ばれる代物

神速が如き速さで完食したらしい少女が俺の持つていたカツプラーメンを分捕る。

か？ おい、さっきまでの陰鬱な雰囲気は何処へと消えた。

奪い返そ^レうとも思^ハうたが
あまりの速^さいで食^くい思^ハわす手^を出
せなかつた。

と租借して

というかカツチラーメン一個つて、正直言つてその体格の少女の
摂取するカロリーじゃないだろ。

そんな俺など知らぬとばかりに、ゴクゴクといい音を立ててカツラーメンを飲む（決して間違つてない）少女だつたが、ついに一個田も食べ終わつたらしく、ゆつくりとカップラーメンの容器を口から離した少女は、けふつと息を吐きつつ此方を見てきた。

..... 食われる？！

そう思つたが、別段そんなことはなく、俺を指差してくる。

……先程もフォークの先端を向けてきたような気がするし、もし
かしたら癖なのだろうか。

「貴公は……私の契約者だと言つたな？」

ゆうべつと、蛇の如き笑みを浮かべつつ少女が問い合わせてくる。

いや、お前自分から『世迷言』とか言って否定しだろ！？

「世迷言だと言つ」

「黙れ食うぞ」

「はい、契約者です」

あまりの気迫に思わず頷いてしまった。

『……年下の少女に押される男の人つて……』だと? いや、物凄い気迫なんですって。

「ならば、私は貴公を従える権利があるわけだ……」

「いやな

「黙れ食うぞ」

「ありますとも」

……だから物凄い気迫なんだつて。もうほんと。マフィアのマフィアのボスぐらい。

マフィアのボスを見たことはないが。

「よし、ならば貴公。今日今この瞬間から私をこの家に住ませる、それと十分な食料をよこせ

「ハア! ? 何言つ

「黙れ殺すぞ」

「どうぞお住みください

ついに食いつから殺すになつた。

……俺、何か悪いことしたか……?

「それとこの世界の最低限の知識も全てよこせ」

「いいが、俺は面倒が嫌

「殺す

「ピックボックス

「我が家へよひつけ! 歓迎しようつ、盛大にな

満足げに微笑む少女。

ああ、なんで押されてるんだよ……そして何で住ませてるんだよ
俺……。

これは……面倒なことに……なつた……。

04・食（後書き）

よもや、これが朔咲尚紀が主軸となる話は最後だとは……誰も思つまい。

……誕生日に何書いてるんだろう、私は。

05・買い物（前書き）

前回で朔咲尚紀主観の物語は最後と言つたな……？

あれは嘘だ。

あと、今回なんか長いです。前回までの大体1・5倍程度の文字数です。

なー? ま、また、落ち着くんだナオキ。ダ、ダメだ。まだ早い。そ、そんなの……。

何を言つているんだお前は、もう十分だろ? それに、お前だつて我慢のし過ぎで苦しそうだがなあ?

そ、そんなことはないッ! く、苦しくなぞつ……!!

口ではさう言つても、体のまづは疼いてるみたいだが?

で、デタラメを言つた、た、頼むから……頼むから、もう少し……もう少し時間をくれ……。ま、まだよく知らないんだ。私は……。

10程度のこととて一々グダグダしてたら前には進めんぞ?

だ、だがつ……!! 頼む。許してくれ……まだ、心の準備が……つー? な、何を?

お前が余りにもグダつくから多少強引に行こうと思つてな。

なつー? や、やめろー!! い、いやだッ!!

ダメだ、流石に俺も我慢の限界なのでな。

いつ……!? い、痛い……痛い痛い痛い……

痛いワケがないだらう。数日前に『あ、私は痛覚死んでるわ、これ』って言つてたのは何処のどいつだ？

ほ、ほんとうに痛いんだ。許してくれ、痛い、痛いい……。

それは痛いと想つから痛いんだ。安心しろ、慣れたらそのまま樂しくなつてくれるさ。それに、気持ちいいぞ？

気持ちいいわけがないつ……！——こんなにも辛いのに樂しくなるわけもないつ……！

ほお、もうすぐ辿り着くぞ？

嫌だあああ……いたいいたいいたい……。

ふむ、もう出せるか……。

なつ……？ やめうつ……！——出すなあつ……！

いいや、限界だ。……外に出すぐ。

「……ふう

空が、今日も青い……。憎たらしいな。まったく。人類を滅亡させたくなる……。

下から呻を声。

俺が空を見上げるのをやめ、見下ろせば泣き喚く件の少女
いや、ミラがいた。

「マジの外道王」・「ニセサムヤク」などと並んでおこた。

何時までも『ジミン・ドウ』とか『ジ・ズ・オーハン』とか呼んでいるワケにもいかんしな。
デイビング・マトモトマツコウタケシ・ラブリー

……ちなみに真名は『貪食なる古龍の子孫ミラ・カウリオドウース・リ・クリエ・ファーゴサイト・ダグヴァ・ゼヴァ』だ。うむ。実にすばらしい名前だ。

まあ、世間を気にして普段は『ミラ・フアーノサイア』と名乗る
よつに言つておいたがな。

「何をそんなに騒いでいるんだ。たかが外に出したぐらいで」
「やのくう
あくまあ
！！！」

ああ、俺をいつ走りにして手に入れたのでな」

まったく持つて散々だつた。

らんのだ。

しかも飯も無茶苦茶食うし。……昨日なんか何食わせたか俺が覚えてない。品数が多くて。

……まあ、そんなこんなでイライラが連なつて勢いでやつてしまつた。

後悔も反省もしてない。する必要がない。

「最低最低最低最低最低最低最低最低最低最低最低最低最低……」

「ああ、ついでこな、お前は本当に……母さんとか富ゆとかとは大違たがいだ」

「……富つて誰だ？ ああ、彼女か……、昨日も電話していしたしな」

「……」

「妹だよー、世界で一番怖い！」

「妹に怯える男の人つて……」

「黙れ引き籠もり」

「今外に出たからもう引き籠もりじゃない。残念だつたな」

……ムカつべ。

そう、俺は今この瞬間。家の中にひたすらに引き籠もつて知識と食物を貪り続けていたミラを無理矢理外に出してやつた。

別に何もやましい事はしていない。俺は親父とは違う。

おい、そこで見ている中年女。強姦魔を見るような目で俺を見るな。

「……で、この私を無理矢理外に出させて何をさせる気だ？」

「まずはお前の服を買う」

「この服があるじゃないか」

そう言ひながらミラは自分の着ている高そうな白い……よくわからんヒラヒラがいっぱい付いた服の端を引っ張る。

やめろやめろ。それは富のなんだ。破れたりでもしたら俺は人がすっぽり入るサイズの電子レンジの中にぶち込まれてワンボタンでチンつされてしまう。

「お前のじゃないだろ」

「……にしても妹のものだらう？ 買つてしまえ」

……こいつ、絶対借りたものを返さない人種だろ。笑顔で言つミラを見て確信した。絶対違いない。

「ダメだ、お前はアイツの怖さを知らないから……そんなことが言えるんだ」

「そんなに怖いのか？ お前の妹は」

「ああ、怖いとも……」

そう、あれは一昨日の出来事だつた。ミラに合わせる服が何もなく、俺のYシャツを着せていたが、なんとも犯罪の香りしかしなかつたので覚悟を決めて妹へと電話したんだ。俺は。

……しばらくして、我が妹は氣だるそうに応答した。
だから、俺は言つたんだ。

お前の服を貸してくれ。と。

そうしたらあの妹は相変わらずの声のブレの一つもない見事な棒読みでこいつ言つたんだ。

『へえ、ついに兄貴にも女ができたか。……バカらしいねえ。彼女や友人……そんな関係、氷の味より味がないつてのに……愚かだねえ、愚かだねえ……』

正直耳が死ぬかと思つた。そして何故俺が他のヤツに服を貸そうとしてるのが分かつた。何も言つてないのに。

……ちなみにそんな俺の妹の口癖は『頭が悪そうなヤツといい関係結ぶのに一千円……親とのダラダラした関係を良くするのに五千円……ファミレスで氷を貪るの、プライスレス』だ。

もう意味がわからない。何がいいたいのかも分からぬ。

分かるのは唯一つ。……生物的逃走本能が騒ぐつてことだけだ。

……でも、アイツはなぜか学校で人気あるんだよな……友人三桁突入するもんな……なんでだろうな……。

ちなみにあだ名は『絶対零度彼女^{クラスメート}』らしい。……どこの漫画だ。

しかも全然合つてないし。

「そこまで怖いかねえ」

「怖いんです」

「信じられんなんあ」

とか何とか言いながら俺とミラは最寄のショッピングモールへと向かう（ちなみに名前は忘れた……レ……レゾ……レゾナンス……いや、レガリア・クラウンだつたか？）。

そこの品数は相当なもので、そこに行つて無ければ、この町には存在しない……と言われてるとかないとか。

……ちなみにそのショッピングモールは俺の家から徒歩三分だ。更にはそのショッピングモールは駅とほぼ一体化してるので、駅までも徒歩三分ということになる。

そう、俺の家はとても立地条件がいい。

更には俺の働いている『鉄板ハイエナ社』の本部にも徒歩十分といふ驚異的な近さ。

……なのが、家賃は非常に安い。平社員の俺でも余裕で支払える程度だ。

理由？ 考えたくも無い。考えたら眠れなくなる、たぶん。

……俺はホラー系の話が苦手だ。

「……人が多いな……」

いろいろとイヤな想像をしていたといふ、ミラが辺りをちらちらと気にしながら呟く。

そういえば、この間一緒に風呂に入った（コイツが一人で入れる

確証がなかつたであり、決して他意はない。俺は親父とは違うのだ。
ちなみに肌は無茶苦茶すべすべしてた）時に聞いた話じゃ、どうにもミラは『じぢぢ』に来る前は、おまか、悔しい姿をした古竜の子孫で、生ま
れて育つた場所（ミラは大広間と呼んでいた）から出ずに過ごして
いたとか……。

ハッキリ言つて絵空事のような信じられない話だったが、信じる
しかないので大体信じた。

「どうした？ 緊張してるのか？」

「全員食いたい」

「やめろ。そんなモノは大量虐殺の親戚でしかないと

……あと、ついでに聞いた話じゃ、主食は人肉で好物は人肉でご馳
走は人肉だつたらしい。

カニバリズムもいいところだ……。

いや、もとは古竜だつたから違つのか……。

「安心しろ、一分冗談だ」

「たつた1%しか冗談じゃないのか！？」

得意げそうな表情で言つた。

そういうのを本気つて言つんですよ、ミラさん。

「騒ぐな、一緒にいて恥ずかしくなる……」

「夕飯抜くぞ」

「ナオキ……お願いだから死ぬまで一緒に居てくれ」

呆れ顔で言つてきたのが妙にムカついたので、軽く脅してやつた
ところ俺の体に重心をちょっと寄せつつ上目遣いで真逆の意見を言
つてきた。

……『イツにはプライドつてものがないのだらうか。

……それにしても、死ぬまでか……。それはそれでイヤだな……。死ぬまで『イツの食費を払い続けるのはちよつと……。

絶対借金まみれになる。

とかなんとかバカなことやつつ……無事ショッピングモール『レゾナンス』に到着した。

レゾナンス……呪いの言葉か何かか？ 恐らく『ロロッケ』や『コケコッコー』と同類に違いない。

「な、ナオキッ……」

なんてどござの妄想を具現化させる物語を思い出してみると、ミラが突然震えた声で俺の名前を呼ぶ。

「どうした？」

何かあつたのかと思つて一度立ち止まつ、ミラの表情を伺いつつ聞いてみる。

……物凄く目にいっぱい涙を溜めて絶望に満ち溢れた顔をしていた。

……？！

「す」「くつ……おおきい……こつ……一……」

「いや、まあ。大きいけどな」

ミラはショッピングモールを指差して震える声でやつてみる。

……何かとんでもないことがあるのかと思つたら、そつでもなかつた。

思わず俺は拍子抜けして普通に返す。

「怖い……！」

「怖い！？」

普通に返したところ、リラが急に意味の分からぬことをここで出した。

確かにこのショッピングモールは大きいが……。

ショッピングモールを見て怖いって訳ひやつ初めて見たぞ！？しかし、演技でもないらしく、ミラは俺の右腕にぴったりとくっ

つき、ガクガク震えている。

「怖いはない。怖いはない。絶対にそれだけはない。うん。無いぞミラ。流石に同意できない」「だ、だつ……てつ……！私のは……私の下の口より大きこよおつ……？」

……たぶん、下の口つてのはミラが元々の古龍の時の姿の時に胸部から下腹部にかけてあつたと言つてゐる『大口』のことなのだろう。

断じて卑猥な意味ではない。

……おい、そこの中年男、「ヤリもなか」「ヤリを貰るな」口う

ヨン死滅しろ

「ああ、安らぐ。」

「だ、だけど、は、入るのつ、入つちやうのつ

1

あります」

「無理だよお……………入らないよおおお……………」

右腕が何か湿つてゐる。あ、きっとこれはリリの涙に違ひない。

スイーツ専門店へ？

ショッピングモールに入るだけでここまで泣くヤツ初めて見たぞ！？

「つていうか、右腕が痛いんだが……血も止まるんだが……離してはくれないか?」
「ほーらなーいーいーいー……むりだよおおお……おねがわーいのよおおお……おお……」

聞いちやいねえ。

……ちなみに、胸が皆無なので『あててんのよ』みたいなウラヤマシイ状況にはなつてない。

おあ

貧乳の控えめな感じは好きだけどな。
などと考えつつ、未だに泣き喚くミツを無理矢理引きずりつつシ
ヨツピングモールへと近づく。

……おい、そのガキ共、指差すんじゃない。そして母親らしき女、軽蔑の視線でこっち見るんじゃねえ。

「入るナビ、大丈夫か?」

〔 〕

……もうコイツ確信犯だろ。

俺を殺しに来てるな？

……ああ、大丈夫ですそこの警備員さん。私はいたつて善良な市民です……警棒なんて取り出さないでください！ 僕は何の棒も取り出してませんから！

警備員に曖昧な笑みを向けつつ開いた自動ドアを通過し、僕はミラをショッピングモール内に無理矢理押し込む。

入った瞬間。ミラは一気に静かになる。

……なんだ？

「……まつたく、このショッピングモールは無駄にデカいな……。大きすぎる、修正が必要だ」

いきなりキリッとした表情になつて『ヤレヤレ』と呆れたポーズをしながら言つ//。

「おい、お前……さつきまでとまるで様子が違うじやないか」「フツ……内側に入つてしまえば大きさは分からない。つまり怖くない……」

ドヤ顔で自信満々に言つてくるミラ。

なんだコイツ。

ここに捨ててやるうか。

「ああて、ナオキよ。私の服を買うんだろう？ 早く行くぞ」「ミラさんミラさん。あなたは俺に謝つてもいいんですよ？」「何を言つているんだお前は？ 脳みそまでカビたか。よく生きられるものだな、それで」

……本気でここに捨ててやるうか。あるいはショッピングモール前の電柱に括り付けとくか？ ……いや、それはダメだ。さつきの中年男みたいな口リコンに襲われる。

こんなに中身はアレなのに見た目は可愛いんだから世の中ってのは不思議だ。……どつちかつていうと俺の妹に友人が多いほうが不思議だが……それはまた別の話だう。アイツだから黒魔術とか使つて洗脳してゐに違ひない。

「……はあ。まあいい……、行くか

「さつさとしろ木偶の坊

「……」

一発殴りたい。

……まあ仕方ない。殴つてさつきから此方をマークしてゐる警備員に取り押さえられたら俺はブタ小屋行きだ。

我慢しよう我慢。……代わりに今日の風呂でこれでもかというほど嫌がらせをしよう。シャンプーを泡立たせたまま放置とか。

……俺つて……ヤな奴だな……。

あと、素手にボディーソープ塗つたくつて洗つて羞恥心に陥れる。なんていうことを考えたエロゲ脳の持ち主たちよ。……それはミラに期待しないほうがいい。こいつは羞恥心皆無だからな。しかも集中しないと痛みすら感じないほど触感死んでるし。

「どうやら衣服類は上みたいだな」

ショッピングモール内の案内板を見ながらミラが呟く。

上か……面倒な。一階に置いておけよ。

とかなんとか思いつつ案内板に階段のマークが記された場所へと向かう。

別に階段を登るワケじやない。階段マーク以外に案内板には何も書かれていなかつただけだ。

……なんだこの店。

そして案内板から歩くこと大体三分。

「ナオキ、階段とエレベーターとエスカレーターとハシゴがあるんだ。どれにするんだ？」

「ハシゴ…？」

「あ。あと登り棒もあるだ」

非常に奇妙な光景に直面した。

……なんとも意味不明なことに数々の上へと行く手段が用意されていたのだ。

「ここは一体なんなんだ…？」

「ショッピングモールだろ」

いやそうだが！

「登り棒って何だよ！？ 誰が使うんだよ！？ 消防士か！？ それとハシゴも意味分からん… つていうかハシゴ高い… 見上げても頂点が見えんぞ！？」

というか、その隣に同じ長さの登り棒。

……SASUKEでもやる気ですか、このショッピングモール。

「…………ここは…………無難にエレベーターだな、ちょうど今來たし」

「私は折角だからこの赤い登り棒を選ぶぜ」

「…………先に言つておく、ミラ、お前死んだぜ」

チーン、という聞きなれた音と共にエレベーターが到着し、扉が開く。

中には誰もいない。うん、流石平日の朝。誰もいねえや。俺は戸惑うことなくエレベーターへと入り込む。そしてミラも戸惑うことなく登り棒へとつかまる。マジでやるのか……上のほうまで行つて落し下したら死ねるぞ、あれ。

なんて考えつつ、上へと向かうボタンを押し、扉も閉める。
しばらくしてゆうくつとHレベーターが上へと上がつていぐ。
どうせまだ//は下でモゾモゾやつてゐだらうから、上に着いた
ら見てやつ。やつしよ。

そう思つと内心笑いが込み上げて来て、思わず一ヤける。
アイツを上から見下す気分は最高に気持ちいいだろうな。 そう思つて今か今かとエレベーターが到着するのを待つ。
待ちに待ち焦がれて、ようやくエレベーターがその重い扉を開いた。

「遅かつたじゃないか……」
よし、思いつきり見下すぞ。

なんでもう到着してるんだよ、バケモノかよ。

エレベーターが到着したときには既に青と白のストライプ模様の逆三角形の下着を惜しげなく世に晒したミラが腰に手を当てて薄い胸を張つて仁王立ちしていた。

「前半葉」

「あ、悪い。服は登ってる途中で破けた」

ああ、確かにその服は
富のだつたなあ……。

直後、俺の脳裏に皆既月蝕によつて真つ赤に染まつた月、そして
その月の明かりを受けて真つ赤に染まつた草原にて俺の妹 朔

咲宮が日本刀を片手に高笑いしている光景が映る。

……その日本刀は何故か赤黒い何かがベツタリと付着していた。
死んだのは俺ってか？ ハハ。そのとおりだよまったく……。
俺死んだ。俺終わった。楽しかったこの人生。思い残すことは未

だに童貞なことか。

「まあ、私の下着見れたんだからいいだろ」

そんな俺の気など知らず、ミラは堂々と言ご放つ。
「こいつ分かつてないよ……」

「……ミラ先生。下着はですね、ただ見えれば嬉しいってワケじゃないんですよ。履いている子が恥ずかしがって、美しいものへと変わるので。堂々と晒されてちゃあ何にも変わりません」
「どうでもいい。やつさと服を買ひや。足が寒い」

自分で振つておいてそれかよ！？

しかも足が寒いって……自業自得だろ……、しかも一番損するのは俺だし……。

……そしてオイ、そこの中学生。与メ取つてんじゃねえ、その高そうなスマートフォンに穴空けるぞ。

「はああああー…………お前置いて一人で買いにこねばよかつたよ
「まったくだ、だから私は抵抗したといつのに」

「…………貴様…………後で覚えてろよ…………風呂で地獄を見せてやる」

「フツ、無駄だ、私は感じんし恥ずかしがりもしないッ！　よつて

風呂での悪戯は全て無意味なのだよ！　クアハハハハハハハハハハハハ！」

……なんとしてもコイツを屈服させたい。何かいい方法はないのか

？

05・買い物（後書き）

次回、変態企業の社長が顔を現す……かもしれません。

06・買い物／続（前書き）

今回変態企業の社長が現れると書いたな……？
あれは嘘だ。

俺は失念していた。

「//アと共に衣類のコーナーに辿り着いた俺は即座にそう思つた。

何故なら 。

「で、ナオキ。どうこいつの買えぱこと思ひつへ..」

「..... わあ.....？」

俺達二人はどちらもファッショソに非常に疎かつたからだ。

「ええい、役に立たない契約者だなお前は！」

「髪をクシャクシャと搔き回しながら//アが若干棘のある声でそう言つ。

「ほう、田頃からメシと寝床..... その他イロイロを無償で恵んでもらつてる奴の台詞か、それが.....」

「面白こことを言つ。

「//ア君。今日中に荷物をまとめてね、明日から俺の家に君の居場所ないから」

「おいらペシトを捨てるな。こんなメス犬滅多に居ないぞ？」

自分で自分のことをメス犬呼ばわり！？ やつぱりこいつ、策划がないな.....。

いや、もしかしたら俺のことをバカにしているのかも知れない。自分も若干恥ずかしいが、俺をバカにし、俺がそれで満足そうな表情をするのを見て心の中でほくそ笑んでるのかもしれん。

試すか。

「犬は『わん』以外言わないとと思うが？ それに一足歩行もできないだろ？」

「わんわんわんわん！ はつはつはつはつは……わんわん！」

地面をシャカシャカと両手両足を使って四足歩行しつつ、わんわん言つミラ。

……あ、コイツは本物だ。プライドなんてモノ存在しない。

「お恼みですか？」

どうしたものか、と俺が唸り、未だにミラがわんわん言つてると、見事な営業スマイルで女性店員が話しあけてくる。

お、これは助かったかもしれない。何とかしてミラに似合つモノを……。

……いや、それ以前によく話しかけられたな。下半身下着一枚でわんわん言いながら四足歩行でグルグルと回っている少女の横に立つている俺に……。

「ああ、私みたいなクズでゴミみたいな見た目ぐらいしか取り柄のない淫乱メス犬に似合つ服を探していな……」

俺が今にも答えよつとしたといふ、すべつとミラが立ち上がりつて至つて真剣な表情で意味不明なことを口走る。

「どうぞ、『わんわん』お選びください」

意味不明なことを口走りだしたミラを明らかに避ける形で女性店員が去つていく。

なんてことを……。

ちなみに引き際も営業スマイルを崩さなかつた。……あんたはようやつたよ。チップの制度でもあればチップを渡してもよかつた。

「なんだ……あの店員は……ちゃんと調教されてないな」

しかし、原因となつたミラは呆れるよつた視線を店員へと向けつ、とんでもないことを口走る。

「……いつ、大物だわ。

「……いや、明らかにお前が悪い
「何をう。私は悪くないぞ。絶対に」

不満そうに唇を尖がらせつつ言つた。

「いや、どう見てもお前が悪い。それ以外何もない。
とか何とか考えつつ、適当に手にとつては見比べ、手にとつては見比べを繰り返してみる。

全部似たり寄つたりな感じの「デザインだな……とか思いつつ見比べを進めていると。

何か他の衣類とは違ひ、何か……いつ……オーラといふか、覇気というか。

なんとも言い表せない氣配を漂わせる衣類に出会つた。

恐る恐るハンガーを取り、その衣類の全体像を確かめる。
基本的な形は黒いロングパークー。

……だが、何か、良くない思考に取り付かれたのか、ジッパー部分全般にキバでもイメージしたかのような三角形の白い布が陳列し、フードの頂点はヘビの口の上半分のようになつてゐる。更には背中には若干大きめ（それでも動きの邪魔にならない程度で前から見れば大してわからない）のコウモリの羽のようなものが一対。そして丁度腰辺りにガラガラヘビを彷彿とさせる縞模様の入つた尻尾。

……あまりいい趣味とは呼べないような服だ。だが、……非常に似ている。

ミラから聞いたミラの過去の元の姿とやひり。これを買つたら喜ぶだらうか？

そう思つて値札を見る。

『￥57600』

あ、こりや無理だわ。バカ高エ。法外すぎる。……ヒツカ俺の財布が壊滅する。

戾そつ。ミラには悪いが流石に無理だ。今すぐもとの場所に戻そ。

「まひ、すばらじこモノをお持ちだな……ナオキ？」

戾そつとして手首をミラに捕まれた。
……終わつた……。

とよなら、俺の財布の中身達……。

「買つか？」

「買わないと食こ殺す」

ニカツとこう笑顔で恐ろしことを言ハミラ。

殺す宣言をされてしまつた……とこつか、やつぱり氣に入つたか……

アハハ。

あはは……。

「ああ、あとこれもな」

そういうてミラが手渡してきたのはネコだかイヌだかのミミがフ

ード部分に付いたロングパークー。
お前もパークー選んだのかよ！

「何だこれは……ネコミミロングパークー？」
「違うな、貪食ハイエナパークーだ。裏側の素晴らしい文字と値札
を見てみる」

いや……違う分かんねえから……。

言われるがままにパークーを裏返すと、見事に白い文字で大きく
『貪食』の一文字が書かれていた。

……いや、まあ。お前は貪食を体現したような存在だけな……。
ここまでしなくても……。

お次に値札。バカ高いとかじやないだらうな……？

『￥22800』

高いイイイイイイイー！！

貪食パークーの半分以下だけどそれでも高いイイイイイー！！

が、そこよりも更に目が付く場所があつた。

製作メーカーの欄だ。

『鉄板ハイエナ』

俺の会社かよ。
こんなもの作ってたのか？俺の会社は……。IS関連の会
社だつたような……。

あ、ちなみにISというのは正式名称『インフィニット・ストラ
トス』と言うもので、元々は宇宙空間での活動を想定し、開発され
たマルチフォーム・スーツ……だつたんだが、何でも日本に向けら
れて放たれた2300発ぐらいのミサイルをぶつた切つた拳銃、戦

闘機や戦艦などの軍事兵器の大半を撃破したお陰で、従来の兵器を凌駕する圧倒的な性能が世界中に知れ渡り、宇宙進出よりも飛行パワード・スーツとして軍事転用された……という妙な経歴を持つ『女性専用』の最強兵器だ。

そう、ISは女性以外に動かせない。理由は知らない。製作者の篠ノ之……た、ターニャ？ 博士に聞いてくれ。

……このことを発表されてから以降世界が女尊男卑の世界が構築されたりもしたが、もとから嫌われる俺には何の関係もなかつた。だが……、飛行パワード・スーツなどという俺が中学生時代に『第00式 飛行型殲滅兵器 タグラム+』という名前で考えていた兵器が実現したのを聞いたときは『何で俺は女じやないんだよクソガツ！』とお気に入りの洋楽CDを真つ二つに割った記憶がある。

……ああ、懐かしい。今から大体三年前ぐらいの出来事か……。

あのCD、十万もしたのにな……何で割つたんだろうな……。

「ふん。 どうだ？」

なんてイロイロと思い出したくない俺の背負う悲しみを思い出していたところ、ミラは薄い胸を張りつつ腰に手を当てて得意げそうにしていた。

……いや、何が！？ 鉄板ハイエナ社の商品だから何だよ！？

「あ、ついでにこれも」

そういうて手渡してきたのは割りとポピュラーそうな真つ黒なTシャツと薄茶色の短パン。

……値段？ どちらも五千円以下だ。

「なあ、ミラ。 」のパーカー一つとも買わずにこいつだけ買わないか？』

「丁重にお断りする

せんでいい！

思わずそう叫びたくなりもしたが、仕方がない……。
まるで足が鉛になつたかのように進まなかつたが、何とかレジまで持つていき、十万近い出費をする。

……財布の中身が全滅？ 二十秒足らずでか？
かなりの精神的ダメージを受けた。もうダメだ。
と俺が落ち込んでいるのを余所目に。

「あー……なんか腹が減つたな……」

悪魔は残虐な言葉を呴いた。

「よし、ナオキ。飯にするぞ」

「それは、俺に死ねと言つているのか？」

「は？ 何ボケたことを言つてるんだ、メシだメシ……お、あそこ
の店でいい」

呆れた様子のミラが指差すのは何の変哲もないファミレス。

……思わず一安心。

バカ高そうなステーキ屋とか見つけてなくてよかつた……。
だが、それでも俺にとつて致命的であることに変わりはない。

「……分かった、が……とりあえず俺は銀行で金を下りしていく。
だからその間に着替えておけ」

「よし、この貪食パークーだけ着て後は全部脱げ」

「いや、それはダメだろ！」

「何故だ！？」

「逆に何故それでいいと思つたんだ！？ そしてその黒いTシャツ

と短パンを何のために買ったんだ！？」「え、着るからだけだ」

「分かつてゐなら着る！ それと貪食パーカーを外で着るのはやめろ！ せめてハイエナパークーにしとけ！」

「口煩いヤツだなあ、お前は」

「この女……一発殴りたい……」

「わ、ミツカさんはちょっと簡便してください。本当に……おい、そこの中年女一人組み、こいつ指差して噂話してゐんじゃない。消え失せろ。」

「ふーむう、着るのは分かつたが、待つてるのが暇だ。暇すぎて死んでしまう……何かないか？ P S Pとか」

「無いし買わんぞ。……ほら、1000円やるから菓子コーナーでも見てるかなんか食つてろ」

「私は三歳児か！」

「三歳児に1000円は渡さないと思つぞ！？」

「どんだけリツチだよ、その三歳児。」

「三歳ぐらいなら1000円とか何でも買えるレベルじゃないか。」

「冗談は顔だけにしろ。」

「冗談だ、ほら、せつと行け。私が空腹で死ぬ前に」

「……お前が昨日食つた量を思えば一週間ぐらい何も食わなくとも生きてけるんじゃないかな？」

「とか何とか思いつつ、俺はエレベーターへと向かう。……俺の財産をミツカの買袋に投げ捨てるために……。」

06・買い物／続（後書き）

次回いよいよ出でます。変態企業社長。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4709y/>

貪食IS-Gaping IS-

2011年11月23日13時53分発行